慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「啓蒙主義」的な読書の切り崩し : E.T.A. ホフマン『花嫁選び』における引用
Sub Title	,,Aufklärerische" Lektüre unterlaufen : Zitieren in E.T.A. Hoffmanns Die Brautwahl
Author	池中, 愛海(Ikenaka, Ami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.197 (46)- 211 (32)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「啓蒙主義」的な読書の切り崩し
E.T.A. ホフマン『花嫁選び』における引用

池中　愛海

1. はじめに

E.T.A. ホフマン（1776-1822）が生まれた18世紀は、読書という営みが画期的な変化を遂げた時代だった。研究者の間で「読書革命（Leserevolution）」[1]と呼びならわされる、書物の出版数の増加や読者層および読書形態の変化といった一連の出来事は、当時の人々にも、否、むしろ当時の人々にこそ、明確に認識されていた。[2]とりわけホフマンは、読書革命によって形成されていった現実の読者層[3]を意識すると同時に、「読書熱（Lesewut）」にとりつかれた読者像をはじめ、さまざまな読者の姿に注目し、その様子を作品に描き込んだ。『牡猫ムルの人生観』（1819/1821）で自身の無節操な読書歴についてたびたび言及しているムルは、まさに「読書熱」にかかった読者のカリカチュアである。また、これまであまり注目されてこなかったものの、ムル以外の登場人物たちもそれぞれのスタイルで読書にいそしむ。[4]そのほかにも、ホフマンの生前最後に発表された『いとこの隅の窓』（1822）では、「花売りの娘」のエピソードによって当時の読者の姿、ひいては書物の流通システムの結果として生じた読者と作家との関係性が浮かび上がってくる。[5]

こうしたホフマン作品内の読者たちは、単に書物を読むだけではない。彼らは読んだものを引用し、ときにオリジナルとは異なるコンテクストへと移し替えることで、引用されたテクストが新たな意味へと開かれることを可能にする。読んだ書物から引用が行われ、その引用によって新たなテクストが作られ、また新たな読書が促される。このように、読書と引用とは常に表裏一体であり、切り離し

て考えることはできない。にもかかわらず、ホフマン作品、とりわけ『牡猫ムル』における引用についてのこれまでの研究[6]では、引用元のテクストに対する批判やパロディーとしての効果など、しばしば引用にのみ重点がおかれ、引用を基礎づけている読書行為とどのような関係性にあるかという点はあまり触れられてこなかった。そこで本論では、読書と引用という不可分なふたつの営みをひとつの作品内で考察するために、『花嫁選び（Die Brautwahl）』[7]（1819）を考察対象として取り上げる。

『花嫁選び』はベルリンを舞台とした物語で、そこでは、身分も年齢も異なる三人の男がアルベルティーネという名のひとりの娘を結婚相手として取り合う。誰に決めても残りのふたりから不興を買い、結果として不利益を被るだろうという理由から、娘の父親は三人のうちのひとりを自ら選び出すことができず、最終的に、謎めいた金細工師の提案に従って、小箱を使ったある種のくじ引きが行われる。正しい小箱を選んだ者がアルベルティーネを獲得できるという条件のもと、男たちは小箱を選び、既にアルベルティーネと恋仲となっていた若い画家が見事彼女を勝ち取るが、一方で他のふたりもそれぞれ納得のいく品を小箱から得ることができ、全員が満足して物語は幕を閉じる。こうした筋立てからもわかる通り、『花嫁選び』は物語の一部が既にシェイクスピアの『ヴェニスの商人』のパロディー、すなわちある種の引用となっている。

この物語の主人公のひとりであるトゥスマンは、ムルにも引けを取らないほどの読書好きとして描かれる。役人として働き、「啓蒙主義」[8]を標榜しながら毎日規則正しく質素な生活を送る彼の唯一の楽しみが、読書である。その読書への情熱は「読書狂」と評されるほどで、「外出する際には常に両方の上着のかくしに本をいっぱいに詰め込んでいた。歩いていても立ち止まっていても、散歩中でも教会でもコーヒーハウスでも読書をした。目の前にあるものはとにかく片っ端から読んだが、新しい作品は嫌い、古い時代の書物ばかりを読んだ。」（669）一方で興味深いことに、彼が「啓蒙主義」者を自任していることと呼応して、彼の行う読書行為も、一見すると啓蒙主義の特徴を帯びている。それゆえトゥスマンは、ときに他者を啓蒙するために、ときに自分の教養が確固たるものであることを示さんがために、ムルに負けず劣らず、自分が読んだものを次々と引用してみせる。

しかし、これから本論で明らかにしていくように、トゥスマンによる引用は実

際には彼の「啓蒙主義」的な読書を裏づけるものではなく、むしろ彼の読書と啓蒙主義との矛盾を明るみに出す。ホフマンは、冒頭で述べた「読書熱」の普及をはじめ、後述する読書と啓蒙主義との関係など、読書という行為が持つ歴史的・文化史的背景を十分に理解し、それらを自身の作品に取り入れているが、そうした背景をもとに行われている作中の引用では、作品に固有の機能が生じている。それゆえ本論では、そうした引用行為の機能を探るべく、『花嫁選び』におけるトゥスマンの読書と引用との関係について考察する。まずは次章で本作品に関するこれまでの先行研究を概観し、本論で追究する問いをより明確にする。

2. 先行研究概観および本論の立ち位置

ホフマン作品の中で『花嫁選び』は、決して注目度の高い作品ではない。前川道介は本作品に高い評価を寄せ、「本国の批評家学者たちの間でも、この作の深さやその味、あるいは筋の独創性ということになると、それぞれ意見があるものの、その面白さについては、私の知るかぎり異議を唱えているひとはいない」[9]と述べているが、その一方でおよそ30年後の1995年、ホフマンのベルリン作品群についての論考の中で木野光司は、ドイツの研究者の間で本作品の評価が芳しくないことに言及している。[10]そこから20年以上たった現在にいたるまで、この評価にはさほど大きな変化はみられない。デートレフ・クレーマーが編集した最初のホフマンハンドブック[11]では、特筆すべき点はないとみなされたのか、ひとつの作品として解説する記述すらなく、最新の『ホフマンハンドブック（E.T.A. Hoffmann-Handbuch）』でようやく3頁程度の紙面を与えられている程度である。[12]こうした扱いに呼応するように、本作品の数少ない先行研究の大半は、登場人物のモデルの特定や作品が創作された際の歴史的な背景の詳述に終始している。[13]貴重な例外は、作中に登場するユダヤ人諷刺の描写から本作品を反ユダヤ主義をめぐる議論へのひとつの回答として読むグンナー・オホの試み[14]であろう。しかしこの論考においても、ユダヤ人ではないトゥスマンは周縁部に留まっている。

トゥスマンに関しては、これまで、杓子定規なほど時間通りの生活を送りながら、自他ともに肩書きを過度に気にかけるといった理由から、「俗物（Philister）」という言葉で語られてきた。彼が「啓蒙主義」を標榜していること自体は、ほとんど等閑視されているといってよい。それと同様、トゥスマンの読書にも、その

行為が「俗物」的であるという以上の指摘はこれまでなされてこなかった。その原因はおそらく、「啓蒙主義」を謳う彼の読書に対する情熱が度を超した滑稽なものとして描かれており、「啓蒙主義」という言葉そのものが読者の笑いを誘うためのいわば道具立てとしてしか機能していないと考えられてきたということではないだろうか。それゆえ、トゥスマンの読書の在り方が実際にどれほど当時の啓蒙主義と読書との関係を反映しているのか、そしてそれに対して彼の引用がどう位置づけられているのか、という点を深く掘り下げた研究は存在しない。[15]

以上のことから、啓蒙主義をひとつの手がかりとしつつ、『花嫁選び』におけるトゥスマンの読書の特徴を分析したうえで、その読書との関係において、彼の引用がどのような機能を果たしているのかを探ることを本論の目的とする。以下の章では、まず第１節で、当時の読書と啓蒙主義との関係を背景に、トゥスマンの読書が啓蒙主義と結びつけられていることを検証したうえで、この結びつきを彼自身の引用行為がいかにして転覆させているか、そのプロセスを続くふたつの節で描き出すことを試みる。第２節では、「迷信」と「啓蒙」という対立軸をめぐって、トゥスマンの読書の目的と手段とがずれていくさまを示す。第３節では、トゥスマンの「啓蒙主義」的な読書のもうひとつの側面に焦点をあて、書物からの引用が現実の生の代替行為となっていること、それによって彼の読書がまたも啓蒙主義が是とする読書から乖離していく様子をみていく。これらの考察を通して、トゥスマンによる引用が、「啓蒙主義」の実践であるはずの彼自身の読書を内部から切り崩し、空疎化するプロセスとして機能していることが明らかになるだろう。

3. トゥスマンによる「啓蒙主義」的な読書

3-1. 啓蒙の手段としての読書

まずはじめに、トゥスマンが「啓蒙主義」の支持者であり、彼の読書行為がこの思想と大いに関係しているという点を具体的に確認しておく。地下の酒場で出会った謎の老人マナッセが魔女裁判や異端審問をほのめかす話題を口にするのを聞いて、トゥスマンはこう述べる。「ああ、あなたがおっしゃっているのは、かつて行われていたあのおぞましい魔女裁判や異端審問のことに違いありません！〔…〕ええ、もちろんあれはひどい出来事でした。その悪しき事態に、我らが素

晴らしき啓蒙主義が引導を渡したのですよ。」(651) ここでトゥスマンは「啓蒙主義」を称揚する傍ら、魔女や魔法といった存在を否定している。すなわちトゥスマンにとって「啓蒙主義」とは、正しい知識によって、その対極にある迷信を駆逐してくれる思想である。

そして、彼にとってもはや趣味を越え生きがいと化している読書もまた、ホフマンによって啓蒙主義の思想と暗に結びつけられている。たとえば、数ある書物のなかでもとりわけ大切なものとして、トゥスマンは「トマジウス氏」の本を常に持ち歩いているが、このトマジウスという人物は、啓蒙主義の文脈では非常に重要である。イギリス、フランス、ドイツとそれぞれの国で似て非なる形の発展を遂げた啓蒙主義全体の始まりを一概に定義することは容易ではないが、少なくともドイツ啓蒙主義の嚆矢となり、その始まりの一端を担ったのはクリスティアン・トマジウスであった。[16]当時ライプツィヒ大学で教鞭をとっていた彼は、1687年10月24日、来たる冬学期の講義をドイツ語で行うことを学生たちに宣言した。この出来事は、学者や領主たちがラテン語かフランス語ばかりを用いていた時代に、トマジウスがきわめて自覚的に、ドイツ語を学問の場に持ち込んだことを示している。蒙昧を明るく照らす明晰な悟性や思考は、改良されきちんと整えられた母語によってもたらされる、というライプニッツの考え[17]が暗示しているように、母語であるドイツ語で話し、書き、思考することは、ドイツ啓蒙主義の興隆のひとつの重要な土壌だった。ほかでもないトマジウスの著書は、それを愛読書として持ち歩いているトゥスマンの読書を、物語の冒頭から暗に啓蒙主義と関わりのあるものとしてしるしづけているのである。

読書に付随した彼の特技もまた、彼の読書と啓蒙主義との関連性を裏づけている。語り手の紹介によれば、こと読み物に関して、トゥスマンは驚異的な記憶力を発揮する。

> ある本を読む際、彼は気になった箇所すべてにしるしをつけておき、その後、そのしるしをつけた箇所を再び読み返すのが常だった。そうすることで彼はその箇所を二度と忘れることがなかった。かくして、トゥスマンは博識家、すなわち生きた百科事典となったのである。何かある歴史的なあるいは学問的な覚書が必要になると、この百科事典が開かれた。(669)

「生きた百科事典」という比喩は、いわば知の集合体としての彼の役割を指し示している。周囲の人々は、知りたいことがあれば彼を訪ね、必要な知識を教授してもらう。加えて、「外出する際には常に両方の上着のかくしに本をいっぱいに詰め込んでいた」点を考え合わせると、もはやトゥスマン自身が歩く図書館の様相を呈しているといえるだろう。[18]

事実、図書館とは、啓蒙主義と読書との仲立ちを果たした重要な場であった。もちろん、現代における公共図書館とまったく同じものが登場するのはまだ先のことだが、その前身と呼ぶに値するいくつかの機関は既に存在していた。貸本屋（Leihbibliothek, Leihbücherei）と読書協会（Lesegesellschaft）である。それらは読書革命の興隆とともに急速に数を増していった。個別の特徴に鑑みて、[19]ここではとりわけ読書協会の方に焦点をあてて論を進める。カントによる啓蒙の定義を前提に、「啓蒙主義は、著述と読書と議論を媒介とする〈コミュニケーション過程〉Kommunikationsprozeßにほかならない」[20]とする三成美保は、読書協会が、「読書のみならず、議論を重視した」[21]ことで、「啓蒙期ドイツのコミュニケーションに決定的な役割をはたした」[22]と指摘した。定期刊行物を共同予約するだけのものから、それらを回し読みする読書サークル（Lesezirkel, Umlaufgesellschaft）、書庫を持つ読書協会（Lesebibliothek, Lesegesellschaft）、閲覧・会合用の部屋を備えた読書クラブ（Lesekabinett）まで、広義の読書協会にはさまざまな形態が混在しており、それぞれの結成経緯やメンバー構成にも地域差があったが、主な活動内容としては、学芸に関する知識を深めるために、総合雑誌や歴史・政治雑誌など、重要かつ有益な雑誌や書籍を購入して保管し、それらを読んだ者同士で語り合い、ときに議論するというのが基本的な方針であった。[23]

こうした特徴は、トゥスマンにもあてはまる。彼は読書を娯楽として楽しみながら、ただ楽しむだけではなく、実生活に役立て、ときに他者にもその知識を広めようとする。[24]また、18世紀後半の読書協会の会員のうち最も多くの割合を占めていたのは官僚であるが、[25]トゥスマンも官僚として枢密官房書記官（Geheimer Kanzlei-Sekretär）という肩書を持つ。そして、新しい読み物を忌避し、古い時代の書籍ばかり手当たり次第に読み漁っている彼は、自身の読書経験をもとに、レーオンハルトや友人のフォスウィンケルを相手にたびたび議論を繰り広げる。トゥスマンの読書は、トマジウスという名によって啓蒙主義と密接に結びつけら

れているのみならず、啓蒙主義の推進力のひとつとなった読書協会と多くの共通点を有しているのである。

3-2.「啓蒙」と「迷信」の逆転

ところが、まさにこの読書協会が重視していた議論の過程において、トゥスマンの読書と「啓蒙主義」との関係は、奇妙な矛盾を露呈させていく。ある晩、不可思議かつ恐ろしいめにあったトゥスマンはその足でフォスウィンケルのもとに駆け込み、自分の身に起こった出来事を語る。それに対しフォスウィンケルが、君はいつに似合わず強い酒を飲みすぎておかしな夢を見ただけだ、と諭そうとすると、トゥスマンは激しい勢いで反論する。

> 何を言うんだ、取次業顧問〔引用者注：フォスウィンケルのこと〕よ？――僕が眠っていた、夢を見ていただって？　それじゃあなにか、君は、僕が睡眠や夢についてきちんと習っていないというのか？　ならば僕は君に、ヌードウの睡眠理論を用いて、睡眠とはなにかを、そして夢を見ずに眠ることもできるということを立証してみせようじゃないか。だからこそハムレット王子もこう言っているんだ。「眠る、もしかすると夢も見る」とね。そして夢というものがどのような状態のことをいうのかという点については、もし君がスキピオの『夢』やアルテミドロスの夢についての著名な作品、あとはフランクフルトのこまごました夢の本を読んでいれば、僕と同じように十分な知識を持っていただろうけど。しかし君は読書というものを全くしない。だからなんでもかんでもひどくとんちんかんなことを言うんだ。(671f.)

自分が夢を見ていたのではないことを立証しようと、トゥスマンは睡眠や夢に関する書物を著している人物から、ひいてはフィクションである文学作品まで引き合いに出し、いくつもの具体的な名を挙げてみせる。興味深いのは、読書量の多さや書物からの知識を自らの正しさの根拠とし、さらにはフォスウィンケルの「蒙昧」の原因を読書の欠乏に帰している点である。これは明らかに、上述の「啓蒙主義」の思想に基づいた、読書から得られる正しい知識と迷信とを対置させた構図といえるだろう。

けれども実際のところ、彼がこの引用によって証明しようとしている事柄はと

いえば、まるで過去から来たかのような口調で語る怪しげな金細工師レーオンハルトと不気味な老人マナッセとの出会いや、彼らが披露した魔術的なやりとり、すなわち、「啓蒙主義」が「引導を渡した」はずの超自然的な出来事なのである。かくして、「啓蒙主義」と同じ志向を示していたはずの彼の読書行為は、その対極に位置するものをあくまでも「啓蒙主義」的な引用という手段によって立証しようという矛盾を孕むことになる。

むろん、トゥスマンのこうした言動があえて滑稽に描かれたもので、モデルとなった人物を戯画化して読者の笑いを誘う意図があったであろうことも否定できない。しかしトゥスマンの読書が抱える矛盾は、ただ無意味にちぐはぐで滑稽なだけではない。ホフマンはトゥスマンの「啓蒙主義」的な読書の目的と手段が次第に乖離していく様子を巧みに描き出していく。

依然として自身の話を真に受けようとしないフォスウィンケルの態度を嘆きつつも、トゥスマンは同じ晩に起こったことをさらに語り続ける。曰く、市庁舎の前でつま先立ちをすると、本来なら到底届くはずのない窓の中をなぜか覗き込むことができ、そこでフォスウィンケルの娘アルベルティーネが花嫁衣装に身をつつんで踊っているのが見えた、曰く、どこからか現れた卑劣な人間が通り過ぎざまに彼の足を奪い取っていってしまった、曰く、家の前で彼自身のドッペルゲンガーに出くわした、等々。彼の長々とした語りはフォスウィンケルの信用を勝ち得ることはなく、語り終えた彼とフォスウィンケルとの間で以下の会話が交わされる。

> 枢密官、と取次業顧問は言葉を発した。枢密官、それで君は、この私が、君自身が口にした馬鹿げた悪趣味な戯言をすべて信じるとでも思っているのかね？ ── そんな魔法じみた茶番が、こともあろうに、この啓蒙された、我らが佳きベルリンで起こったなどと耳にした者が、かつてひとりでもいたかね？
>
> そら見たことか、と枢密官房書記官は答えた。ほら、取次業顧問どの、わかるだろう、およそ読書というものがまったく不足しているせいで、君はいかなる迷妄に陥っていることか。もし君が僕同様に、ベルリンおよびシュプレー河畔ケルンの両方の学校で校長を務めていたハフティーツの『侯爵年代記』を読んでいたら、ほかにももっとまったく別の不可思議な出来事が起こ

っていたことを知っているだろうに。〔…〕

なあ君、と取次業顧問は言った。頼むから、枢密官、迷信じみた愚かしい茶番を聞かせるのはやめてくれ。(674f.)

先ほどの引用同様、読書不足を理由に挙げてフォスウィンケルの「迷妄(Irrtümer)」を指摘するトゥスマンは、ハフティーツの『侯爵年代記』という具体的な書物の名を挙げて典拠を示す。ここでもやはり、「啓蒙主義」的な読書の身振りは忘れられていない。それに対しフォスウィンケルは、彼の話を「啓蒙された(aufgeklärt)」ベルリンには相応しくない「迷信じみた(abergläubisch)」茶番だと退ける。ここでフォスウィンケルがはっきりと「啓蒙」、「迷信」というキーワードを持ち出していることで、トゥスマンが掲げる「啓蒙主義」的な読書が抱える矛盾がいっそう先鋭化される。本章の冒頭でトゥスマンが示していた、魔法などの迷信と「啓蒙主義」による正しい知識という二項対立がトゥスマンとフォスウィンケルの間で逆転し、トゥスマンは「啓蒙主義」的な読書に基づいた引用によって、「啓蒙主義」の対蹠点に位置する事柄の証明を試みるという一種のパラドックスに陥っている。このパラドックスを晒すことで、トゥスマンの引用は、いわば彼自身の「啓蒙主義」的な読書の主張を内部から切り崩しているのである。次節では、もうひとつ別の例を提示して、そこでも同様の転倒が起こっている様子をみていく。

3-3. 読書と愛の転倒

「啓蒙主義」を信奉するトゥスマンは、読書による知識を滑稽なほど偏重している。その事実が端的に表れているのが、レーオンハルトに向かってトゥスマンが異議を申し立てる場面である。ある女性との結婚を考えているのだと告白したトゥスマンは、これまで独身生活を続けてきたあなたには女性というものがわかっていない、結婚するなどと言っても、実際のところどうしたらいいのかわかっていないのだろう、という批評を浴びて、こう反論する。

私が実際に、昔の人々がキューピッドと呼んだいたずらものの神の放つ愛の矢に射止められたと感じたとき、あらゆる私の考えと努力は、その状態に相応しい自分になるべく自己形成を行うにいたっていなかったとでも？ ── 難

しい試験に合格しようと思う者は、質問されるすべての学問を熱心に学ぶものではないですか？ ── 敬愛する教授どの、私の結婚というのはひとつの試験であって、私はそれに合格すべく、必要な準備をしておりますし、きっと受かるだろうと思っているのですよ。ねえほら、私が恋をすること、結婚をすることを決めて以来、肌身離さず持ち歩いているこの小さな本を見てください。これをよく見ていただければ、あなたも納得なさるでしょう、私がこの件について思慮深く徹底的に取り組み、決して未経験者には見えないだろうということがね。とはいえ、憚りながら白状しますと、今日にいたるまで、女性という存在のすべてが縁遠いままなのですが。(645f.)

これまで女性とまったく縁がなく、実際に女性と付き合った経験を持たないにもかかわらず、すべてを知識によって補うことが可能だと考えているトゥスマンは、知識と実践とは別のものだということを理解していない。彼にとって結婚とは学校で受けるのと同じ「試験（Examen）」であり、この試験に「合格（überstehen, bestehen）」するための「学問（Wissenschaft）」、「学ぶ（studieren）」、という語彙が並ぶ。なかでも特に興味深いのは、「自己形成を行う（mich ausbilden）」という表現であろう。特定の職業など、ある目的をもってそれに相応しい教育を受け、鍛錬を積むという意味のこの言葉は、本来は恋愛という概念とは結びつき難い。キューピッドという名の「神の放つ愛の矢に射止められた」状態をもシステマティックに捉えているトゥスマンの口ぶりからは、書物からの知識による合理的な思考および自己実現を理想とした「啓蒙主義」的な読書を実践しようとしていることがうかがえる。

事実、ここで彼が「肌身離さず持ち歩いている」と主張する本こそ、かのトマジウスの著作なのだ。しかし、まさにこの本からの引用によって、トゥスマンが掲げる上述の「啓蒙主義」の理想がやはり切り崩されていく。以降、トゥスマンはレーオンハルトが何を言っても、トマジウスを引用して返答する。「この権威ある著者が第7章、〔…〕第6節ではっきりと述べているように」(646)、「第9節で素晴らしきトマジウスはこう言っている」(647)、「トマジウス氏が第17節でしている助言によれば」(ebd.)、「我が作家どのは第5章でこう述べているのですが」(ebd.)、「トマジウスの助言にしたがって」(648)、「トマジウスが教えてくれている通り」(ebd.）等々、彼の意見、彼の人生の指針のすべてはトマジウス

の教訓から成っている。前述の通り、知識と実践との差異を深く考えていない彼にとって、トマジウスからの引用は経験不足を補ってくれるもの、すなわち、彼が本来得るべきだった人生経験と置換可能なものである。恋愛や結婚というイベントすらことごとくトマジウスの言葉通りに実践しようとしているトゥスマンの生活は、もはやトマジウスの引用をなぞり、実現するだけの場となりつつある。

ところが、こうした読書の仕方は、「読書熱」が広まった時代に、まさに啓蒙主義の目指す読書に反するものとして批判されていた。そうした批判を展開した人々は、熱心に本を読むせいで物語と現実との区別がつかなくなっている読者が少なからずいるとして、とりわけ女性や子供が虚構の物語を読むことを強く諫めた。[26]トゥスマンの場合、読み手は成人男性であり、読み物も小説の類ではないが、本からの知識と現実の人生経験を一括りにしている点においては、書物の中で書かれている事柄と自らの生との間の線引きができていない読者の一形態といえよう。ここでもまた、「啓蒙主義」的な書物からの彼の引用は、彼の「啓蒙主義」的な読書を裏づけるどころか、その倒錯ぶりを明るみに出しているのだ。

4. 結びにかえて

「啓蒙主義」者を自任し、「啓蒙主義」に立脚していたトゥスマンの読書は、たしかにさまざまな点で啓蒙主義との関連をうかがわせていた。しかし彼の引用行為は、読書と議論によって迷信などの蒙昧な物事を排し、合理的な思考を行う人間を形成するという理想の実現を証だてるものではなく、むしろその理想を転覆させ、結果的にトゥスマン自身の「啓蒙主義」的な読書の、いわば内部からの切り崩しを行っている。ただし、本論で『花嫁選び』におけるトゥスマンの読書と引用について考察するにあたって目的としていたのは、ホフマンの啓蒙主義に対するスタンスを読み解くことではない。それゆえ、戯画化されている対象が何かということは、極端に言ってしまえば、さほど重要ではない。第3章で検証したような、トゥスマンの引用が持つ、内部からの切り崩しの機能やプロセスそのものこそ、本論が明らかにしたかったものである。書物からの知識を引用すればするほど、啓蒙主義本来の立場から離れていくトゥスマンという人物を通して、ホフマンは、もともとの読書の意味内容を無効化し、形式と内容、あるいは手段と目的を乖離させていく引用のプロセスを可視化しているのである。

註

1 読書革命および後述の「読書熱」については以下の文献を参照。Rolf Engelsing: Zur Sozialgeschichte deutscher Mittel- und Unterschichten. 2., erweiterte Aufl. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1978, S. 112-154; Erich Schön: Der Verlust der Sinnlichkeit oder Die Verwandlungen des Lesers. Mentalitätswandel um 1800. Stuttgart (Klett-Cotta) 1987; ラインハルト・ヴィットマン「十八世紀末に読書革命は起こったか」大野英二郎訳『読むことの歴史――ヨーロッパ読書史』ロジェ・シャルティエ／グリエルモ・カヴァッロ編（田村毅他共訳）大修館書店、2000年、407-444頁所収。

2 エーリヒ・シェーンは、当時の読者人口の増加が現代から見ればそれほど大きいものではないことを認めつつも、当時の人々の目にはきわめて激しい増加に映っていたという点を強調している。Vgl. Schön, a. a. O., S. 46.

3 シェーンによれば、18世紀になって初めて現代的な意味での「読者公衆（Lesepublikum）」が形成された。Vgl. ebd., S. 49.

4 『牡猫ムル』におけるムル以外の登場人物の読書については、以下の拙稿を参照。Ami Ikenaka: Zitieren als klassifizierter und klassifizierender Akt. Die Lesenden in E.T.A. Hoffmanns *Lebens-Ansichten des Katers Murr*. In: Religiöse Erfahrung – Literarischer Habitus. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik unter der Leitung von Yoshiki Koda. München (Iudicuim) (im Druck).

5 この点については、特に以下の研究が優れた分析を行っている。Carlos Spoerhase: Die spätromantische Lese-Szene. Das Leihbibliotheksbuch als ‚Technologie' der Anonymisierung in E.T.A. Hoffmanns „Des Vetters Eckfenster". In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 83 (2009), S. 577-596.

6 代表的なものとしては、以下を参照。Herman Meyer: Das Zitat in der Erzählkunst. Zur Geschichte und Poetik des europäischen Romans. Frankfurt am Main (Fischer) 1988, S. 114-134; Sabine Laußmann: Das Gespräch der Zeichen. Studien zur Intertextualität im Werk E.T.A. Hoffmanns. München (tuduv) 1992, S. 144-178; Claudia Liebrand: Aporie des Kunstmythos. Die Texte E.T.A. Hoffmanns. Freiburg im Breisgau (Rombach) 1996, S. 193-234; Sarah Kofman: Schreiben wie eine Katze.... Zu E.T.A. Hoffmanns „Lebens-Ansichten des Katers Murr". Übersetzt von Monika Buchgeister-Niehaus und Hans-Walter Schmidt-Hannisa. 2., überarbeitete Aufl. Wien (Passagen) 2008.

7 E.T.A. Hoffmann: Die Serapions-Brüder. Hrsg. von Wulf Segebrecht unter Mitarbeit von Ursula Segebrecht. 2. Aufl. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 2015, S. 639-719. 以下、本作品からの引用は括弧内に頁数のみを記載する。

8 本論では、一般的な概念・事象としての啓蒙主義と、作中でトゥスマン自身が主張している「啓蒙主義」の二種類を区別して扱う。以下、トゥスマンの主張する「啓蒙主義」を指す場合には鍵括弧をつけて表記する。

9 前川道介「〈嫁選び〉のモデルをめぐって」『京都府立大學學術報告 人文』第15号、1963年、26-42頁所収、26頁。

10 木野光司「ホフマンの〈ベルリン物語〉[Ⅰ]――《騎士グルック》,《大晦日の冒険》,《花嫁選び》を中心に――」『人文研究』第47号、第10分冊、1995年、53-73頁所収、64頁参照。

11 Detlef Kremer (Hrsg.): E.T.A. Hoffmann. Leben – Werk – Wirkung. 2., erweiterte Aufl. Berlin/Boston (de Gruyter) 2010.

12 Vgl. Christine Lubkoll/Harald Neumeyer (Hrsg.): E.T.A. Hoffmann-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Stuttgart (J.B. Metzler) 2015, S. 120-123.

13 フリードリヒ・ホルツェによれば、トゥスマンのモデルとなったのは木版画家であり詩人であり、アカデミーの教授でもあったフリードリヒ・ヴィルヘルム・グービッツ（Friedrich Wilhelm Gubitz, 1786-1870）という人物である。身体的な特徴や性格づけなど、トゥスマンとグービッツはいくつかの共通点を有しているうえ、グービッツが体験した出来事が下敷きになっているのだろうと考えられる類似の出来事が、作中でトゥスマンの身にも起こっている。こうしたホルツェの見解に対し、マーセンはトゥスマンのモデルはグービッツとは思われないと主張し、ホルツェが挙げている根拠にひとつひとつ反論している。Vgl. Friedrich Holze: Einleitung. In: E.T.A. Hoffmann: Schriften des Vereins für die Geschichte Berlins. Heft XLIII. 1910, S. 46-72, S. 65ff.; Carl Georg von Maassen: Vorbemerkungen. In: E.T.A. Hoffmanns sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe mit Einleitungen, Anmerkungen und Lesearten von Carl Georg von Maassen. Bd. 7. München/Leipzig (Georg Müller) 1914, S. VII-LII, S. XVIff. なお、両者の主張を照らし合わせて検討した前川は、ホルツェのグービッツモデル案に軍配を上げている。前川、前掲書、38-41頁参照。

14 Gunnar Och: Literarischer Antisemitismus am Beispiel von E.T.A. Hoffmanns Erzählung *Die Brautwahl*. In: Integration und Ausgrenzung: Studien zur deutsch-jüdischen Literatur- und Kulturgeschichte von der Frühen Neuzeit bis zur Gegenwart. Hrsg. von Mark H. Gelber, Jakob Hessing und Robert Jütte in Verbindung mit Dominic Bitzer, Doris Vogel und Michaela Wirtz. Tübingen (Max Niemeyer) 2009, S. 57-71.

15 なお、他のホフマン作品における啓蒙主義の位置づけについては以下を参照。Irmgard Roebling: Mütterlichkeit und Aufklärung in E.T.A. Hoffmanns *Das Fräulein von Scuderi*. Oder: Geistergespräch zwischen Berlin, Paris und Genf. In: Irmgard Roebling und Wolfram Mauser (Hrsg.): Mutter und Mütterlichkeit. Wandel und Wirksamkeit einer Phantasie in der deutschen Literatur. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1996, S. 207-229; Inka Mülder-Bach: Das Grau(en) der Prosa oder: Hoffmanns Aufklärungen. Zur Chromatik des *Sandmann*. In: Gerhard Neumann (Hrsg.): ‚Hoffmanneske Geschichte'. Zu einer Literaturwissenschaft als Kulturwissenschaft. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2005, S. 199-221; Gerhard Neumann: Roman-

tische Aufklärung. Zu E.T.A. Hoffmanns Wissenschaftspoetik. In: Hartmut Steinecke (Hrsg.): E.T.A. Hoffmann. Neue Wege der Forschung. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 2006, S. 192-209.

16 Horst Möller: Vernunft und Kritik. Deutsche Aufklärung im 17. und 18. Jahrhundert. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1986, S. 22f.; Werner Schneiders: Einleitung. In: Ders. (Hrsg.): Lexikon der Aufklärung. Deutschland und Europa. München (Beck) 1995, S. 9-23, S. 16.

17 Gottfried Wilhelm Leibniz: Ermahnung an die Deutschen: Von deutscher Sprachpflege. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1967, S. 3-24, S. 14.

18 トゥスマンは物語の結末部における小箱選びで、実際に「かつて個人によって所有されたもののうちで最も蔵書豊かで最も完璧な、そのうえ常に持ち運び可能な図書館」（714）と表現される一冊の本を手に入れている。一見すると何も書かれていない白紙の頁ばかりのその本をひとたびポケットにしまい、読みたい書物を頭に思い浮かべると、たちどころにその書物がポケットから現れるのである。

19 貸本屋では低額の利用料を払えば誰でも本を借りることができ、主な利用層は学生、手工業職人、女性、学校教師、非貴族軍人、書記等であった。扱っていた書籍の大部分は小説などの大衆文学である。一方、読書協会は、明確な規約を定めたうえで会員も限定していたため、誰でも参加できるというものではなかった。集めた会費によって運営されていた私設図書館では、小説や娯楽雑誌よりも、歴史・政治記事や時事評論を掲載した雑誌が収集され、閲覧に供された。Vgl. Reinhard Wittmann: Geschichte des deutschen Buchhandels. Durchgesehene und erweiterte Aufl. München (C.H. Beck) 1999, S. 206ff.

20 三成美保「コミュニケーション過程としての啓蒙主義――一八世紀末ドイツの読書協会」『コミュニケーションの社会史』前川和也編著、ミネルヴァ書房、2001年、277-313頁所収、278頁。

21 同上、286頁。

22 同上。

23 Marlies Stützel-Prüsener: Die deutschen Lesegesellschaften im Zeitalter der Aufklärung. In: Otto Dann (Hrsg.): Lesegesellschaften und bürgerliche Emanzipation. München (Beck) 1981, S. 71-86, S. 72f.

24 こうしたトゥスマンの読書の特徴は、啓蒙主義において重要なキーワードとなっている「有益性」と「娯楽性」を連想させる。このふたつのキーワードは、読書協会でも重要視されていた。ミヒャエル・ノルトは、ブレーメンの牧師たちが余暇を「楽しく」かつ「有益に」過ごすためにイギリスの週刊雑誌を共同購入していた例や、「娯楽と実益を相互にうまく結びつけなければなら」なかった読書協会の例について報告している。ミヒャエル・ノルト『人生の愉楽と幸福　ドイツ啓蒙主義と文化の消費』（山之内克子訳）法政大学出版局、2013年、37および39頁参照。

25 上述の通り、読書協会の会員構成を一概にまとめることはできないが、それでもやはり一定の傾向は確認される。リヒャルト・ファン・デュルメンの調査によれば、18世紀後半のボン、トリーア、ルートヴィクスブルク、バーゼルのいずれの地域においても、読書協会の会員のうち最も多くの割合を占めているのは官僚である。Vgl. Richard van Dülmen: Die Gesellschaft der Aufklärer. Zur bürgerlichen Emanzipation und aufklärerischen Kultur in Deutschland. Frankfurt am Main (Fischer) 1996, S. 87.

26 Vgl. Schön, a. a. O., S. 48f.